

短編 8

夢の中の真実

story by aono

photo by mimusan

瞼に光を感じて、秀美は目を覚ました。病院特有の薄いベージュ色のカーテン越しに日光が差し込んでいる。今日も暑い日になりそうだ。カーテンを片側に寄せ、窓を大きく開ける。まだ朝六時だというのに湿気を含んだねっとりした空気が室内に流れ込んだ。

秀美は慌てて窓を閉めた。部屋の涼しい空気が逃げてしまう。振り返ると、ベッドに横たわる息子の翔の顔に日が当たっている。ベッドのヘッドの部分に掛けられた『泉谷翔』のプラスチックの名札が太陽の光を反射していた。急いでカーテンを半分ほど引く。

翔の腕には点滴の管、ベッドの下方から導尿の為の管も見える。意識を失ってからもう二週間が過ぎた。秀美は翔の傍らに跪き、そっと頬を触った。反応はない。回復する時は来るのだろうか。まだ十四歳の子の将来を思うと、不安と恐怖とが体を駆け巡る。秀美のたった一人の息子なのだ。

長かった梅雨もそろそろ明けようとしている七月半ば、翔が救急車でこの病院へ運ばれたとの連絡が警察からあった。公園で翔と彼の乗っていた自転車を見つけたのは通りがかった岡野という大学生だという。

アルバイト先のコンビニへ急ぐ途中だった岡野は、救急車が到着するまで自分のウィンドブレーカーを翔の体にかけてくれたと聞いた。救急車に同乗して病院までついてきてくれた岡野に対して、お礼を言う余裕はその時の秀美にはなかった。

脳挫傷による意識不明の重体。まさか自分の息子がそうなるとは考えもしなかった。現実を拒否したい気持ちが消えない。体には落下した時についたのか、擦り傷や打撲の跡もみえる。

岡野が一一九番に電話したのは午後九時頃。翔が塾から帰る時間だ。家への近道である公園を通り抜けようとしたのだろう。緩やかな坂に段差がついた程度の階段、しかも通いなれた道でどうして頭から落下したのか。警察は、この年代にありがちな無謀さによる事故と見ていた。

「ほんとにそうなの？」

秀美は翔の手を両手で包みながら何度も問いかけた。

スピードを出したまま公園に入ろうとして自転車がバランスを崩したか、何かに車輪を取られたのか、翔は弾みで飛ばされて、頭から落ちた。それが警察の見解だ。事故と断定されれば、それ以上警察は調べることはしない。

秀美も夫の章之も納得できなかったが、反証があるわけではない。

翔は小さいときから慎重な子だった。無理に高い所へ登ったり、飛び降りたりはしない。上を見上げ、下を見下ろして出来るかどうか考えている、そんな性格だった。

「男の子なのに臆病すぎる。もう少し冒険心があったほうがいい」章之はしばしばそう口にしていた。

「こんな軟弱な子に育ったのは君のせいだ」非難の矛先は秀美にも向いた。

「君が甘やかしすぎるからだ。サッカーとか野球とか、なんなら柔道でもやらせたらどうだ」

「そんな風に思うなら、自分で相手してあげればいいじゃないの。あなたは学生の頃サッカー一部で活躍していたと、いつも自慢しているんだから」

秀美も負けてはいない。

「僕が忙しい事は君も知っているだろう」

「息子のために時間を作ることも出来ないの？ 日曜日でも？ 世の中のお父さん達は息子とキャッチボールをするのが夢だと言うじゃないの」

いつも言い争いは平行線だった。何年間も同じ事の繰り返し。翔が夫婦の会話を知っていたかどうかはわからない。多分感づいてはいたことだろう。父親の顔色を窺がうようになったのも、この頃からだ。

小学校の三年生になると、自分からサッカー一部に入ると言い出した。

「そうかそうか、やっとお前もサッカーをやる気になったか」章之は喜んだ。だが秀美は、父親を喜ばせる為に翔が無理をしているのではないかと疑っていた。

「無理しなくてもいいのよ」翔にそう言ったことがある。

「無理じゃないもん」口を尖らせて翔は答えた。

「みんな入るって言うから」

「お友達が？」

「うん、だからぼくも入るんだ」

三ヶ月もすると翔はサッカーの練習に行かなくなった。飽きてしまったのだろうと秀美は思ったが、章之はそれを聞いて不機嫌になった。仕方ないじゃない、本人が嫌だというのだから。無理にさせるものでもないでしょう。

秀美の言葉に章之は翔の顔を見て「そうなのか？」と尋ねた。

翔は泣きそうな顔をしながら、黙って首を縦に振った。

ドアをノックする音がする。秀美は慌てて立ち上がった。看護師が処置台を押しながら病室へ入ってきた。「検温の時間です」

今日もいつも通りの時が流れていく。

秀美は終日ベッドの傍らにいて、翔が元気だった頃の出来事を思い出す時間が多い。

四年生になる前だっただろうか、サッカーに行かなくなって数ヶ月過ぎた頃、翔が犬を飼いたいと突然言い出した。

「翔が飼いたいならいいわよ。どんな犬にしようか」

「健くんちで子犬が産まれたんだって。見せてもらったけど、とっても可愛いんだ。家で飼っていい？」

「あそこの犬は雑種だったわね。雑種はどうかなあ。血統書がある犬がいいんじゃない？お母さんが調べてあげるわ」

秀美はペットショップで見かけた白いビション・フリーゼを一目見て、その愛らしさに虜になった。真っ白で絹糸のように細い毛が全身を豊かに覆っている。目は真っ黒でぬいぐるみのように丸い。

「お買い得ですよ」ペットショップのオーナーが笑顔で話しかける。

「実は月齢が行ってましてね。格安にしております」

「普通なら高くとても買えないけど、ラッキーだったわ」秀美は満足だった。

だが、翔はどう思っていたのだろうか。物言わぬ息子の手を撫でながら、秀美は今更ながら翔の気持ちを聞かなかった事に気づいた。

「この犬を飼うの？」ミルクィと名づけたその犬を見た時、翔の顔に浮かんだ戸惑った表情を秀美は覚えている。

「そうよ、犬が欲しかったんでしょう？ 翔のために買ってあげたのに、嬉しくないの？」

返事もせず、パイと部屋を出て行った翔の背中に「変な子ね」と投げつけるように言った。

それでも翔はミルクィを可愛がった。子犬も翔になつき、秀美はそんなやり取りをすっかり忘れていた。もしあの時秀美がミルクィを引き取らなかったら、処分される運命だったと後で聞いた。余計にいとしさが増していく。ミルクィもまるでそれを知っているかのように、秀美には特になついていた。

だがミルクィは今年の五月、ゴールデンウィークの終わった頃に突然死んだ。三歳半の短い命だった。

散歩から帰ってきた直後、ミルクィは赤や褐色の尿を出し、下痢や嘔吐が酷くなった。

「急性中毒です。脾臓も腫れている」急いで連れて行った犬猫病院の獣医は、額に皺を寄せた。

「普段と違うものを食べさせた覚えはないんですけど」

ぐったりと横たわるミルクィの体は、いつもよりずっと小さく見えた。

「散歩中に拾い食いする癖はありませんか？」

「拾い食い……」

思い当たることがないわけではなかった。ミルクィは散歩中、公園のブッシュの中に鼻を突っ込んで出てこないことがある。匂いを嗅いでいるだけだと思っていた。

「悪いものでも食べたのでしょうか」

「除草剤を舐めたのかもしれませんが。雑草が生い茂る時期には、薬を撒く人もいますからね。たまねぎ中毒の症状にも似ています。結膜が白っぽくなってますし、心臓の鼓動も速い。お宅ではたまねぎを食べさせていませんか？」

「たまねぎ？ 食べさせませんが、たまねぎで犬が中毒を起こすんですか？」

「全ての犬が起こすわけではないですよ。たまねぎじゃなければ、やっぱり除草剤かな」

「この子は、ミルクィは元気になるのでしょうか」声が震えるのが秀美は自分でもわかった。

獣医は額の皺をいっそう深くして首をかしげた。

「出来るだけのことはします」

だが、獣医の手当ての甲斐なく、ミルキーはその夜死んだ。

秀美の膝で愛撫を受け、翔の手を舐めまわし、章之の帰宅時には玄関まで飛ぶようにして迎えに出る。そんなミルキーがいなくなってしまった。

その時から何かが変わったと秀美は感じている。翔は無口になり、章之の帰宅が一層遅くなった。

翔が入院してから、三日に一度、洗濯や掃除をしに自宅へ帰る。章之が病室に顔を出すのは週末だけだ。ウィークデイは仕事で来られないと言う。

「翔が可愛くないのかしら。父親なんだから、毎日でも来てくれればいいのに」秀美の心の中には章之に対する不満と不信が充満していた。

私たちはもう駄目かもしれないと考えることもある。

事故から三回目の週末が巡ってきた。章之に買い物をして来てもらおうと、病室の外から自宅に電話した。留守番電話の機械的な音声に応答している。章之の携帯電話も「電波の届かないところにいるか、電源が切られているためかかりません」とのメッセージを繰り返していた。

携帯電話の電源を切って病室に戻った。しかたがない、自分で買いに行こう。諦めと理由のない気持ちの高ぶりとで涙が出てきた。指で目頭を押さえる。泣く理由はないのに、嗚咽が口から漏れてくる。大きな声で泣き出したい衝動に駆られた。

「どうしたんだ？ 翔になにかあったのか」

声に驚いて振り返ると、病室の入り口で章之が顔を引きつらせて立っていた。

「どういうことなの？」

章之の胸の中で声をあげて泣いたお陰で、落ち着きを取り戻した秀美は、会社をしばらく休むと聞かされて、章之の顔を凝視した。

「有給と夏休みを合わせて休暇を取った。少し調べようと思う」

「調べる？」

「月曜には翔の担任に会って学校での翔の様子を聞いてみようと思う。君だって納得していないだろう？」

「そうだけど……」

「何があったのか、翔が自分で招いた事故だとしても、はっきりと知ることが僕たちのすべきことだと思う。君と僕の大事な息子だ。体の事は病院に任せるしかないが、我々だって出来る限りの事はしよう」

秀美は黙って頷いた。確かに、翔を今まで知らなさすぎた。翔が何を考えていたのか知りたいし理解もしたい、秀美は切実にそう思った。

「君は疲れている。家に帰ってゆっくり休みなさい。今夜は僕が翔のそばにいる」

自分のベッドで秀美は久しぶりに熟睡した。章之は長期間休むことで会社に迷惑をかけないよう、仕事のだんごりを付けたという。「なんといっても、やっぱり父親なんだわ」と秀美は自分の気持ちが和らぐのを感じた。

月曜日の朝、秀美が病室へ戻ると、章之は担任との面会の前に調べる事があると言って入れ替わるように出かけた。秀美は翔の傍らに座り、手を握りながら語りかける。もしかすると聞こえているかもしれない。可能性が少しでもあれば、何でもしたい。

昼ごろ病室へ戻ってきた章之は、窓辺に置いてある椅子に座り、しきりに首を捻っている。「どうかしたの？」

「いやね、転んだだけで脳挫傷になるだろうか」章之は一息ついた。

「自転車から落ちて頭を打つほど飛ばされるとは思えない。公園で調べてみたが、どうも納得がいかない。いくらスピードを出して走っていたとしても、公園の入り口は狭い。普通速度を下げるはずだ」

「何を考えているの？」

「自転車から落下したのは別の理由なのかもしれない、というか、もっと高いところから落ちたとも考えられる」 秀美は目を見張って夫を見つめた。

「そういう可能性もあるってことだ。とにかく午後には担任に会う約束だから、何かわかるかもしれない」章之は両腕を組んで宙を見つめたまま黙ってしまった。

翔が苛めに遭っていたかもしれない、と章之が考えていると秀美が知ったのは、担任との面会から帰宅した時だった。

「担任はクラスで苛めはないと言うんだな。まあ、学校が認めるわけではないが」

「あなたは翔が苛められてたと思うの？」

「そういうこともあり得るだろう」

「おとなしい子だから……」

「いや、それがそうでもなさそうだ」

苛めの話を担任は即座に否定したと言う。

『ありえませんか』

『近頃はどこでも苛めが多いそうじゃないですか。ありえないとどうして言えるんですか？』

『泉谷君は明るくて、人気がありますからね』

『翔が明るくて人気がある？』

『ええ、ひょうきんと言うのでしょうか、物まねもなかなかのものですよ』

『翔がものまねを？』

『お父さんはご存じなかったですか？』

『お恥ずかしい話ですが、息子の事は妻に任せていたので』

『休み時間には、必ず何人かが泉谷君の周りにいて、物まねをしてくれと頼んでました。私の物まねは特に人気があったみたいです。私自身でさえ笑ってしまうほど良く似てるんです。クラスの皆が、彼が回復して教室に戻ってくるのを待っています。苛められていたなんて考えられません』

『家ではおとなしいものですから、学校でそんなに明るく振舞っていたとは知りませんでした』

『お父さんは何故そんなことを考えられたんですか？ 泉谷君は事故だったんでしょう？』

『少し納得できないことがあるんです』

『事故ではなかったと？』

『そういうことも考えられると思っています』

「翔が物まね……」

「君も知らなかったのか」

秀美は力なく頷いた。翔についてはまだまだ知らないことが多そうだ。

「苛めがなかったとは言えない。学校が気づいてないかもしれないからね。だが、担任の話はショックだった」

「私は見たことない、翔のものまねなんて」

「それは僕のせいだ。怒られると思ったんだろう、可哀相に。スポーツ、スポーツと言いつぎたのかもしれない」

「……」 秀美は何も言えなかった。

「とにかく明日は翔の友達にあってみるよ」

翌日の夜、クラスの友達も担任と同じ意見だったと章之は言った。誰に聞いても翔は人気者だったという。

「翔が苛められていなかったとすると、翔が誰かを苛めていた可能性もあるわね」

「何を言うんだ」

「だって、私たち、翔のことをまるで分かっていないじゃないの」

「怪我をしたのは翔だぞ」

「苛められていた子が仕返しをしたとか……」

「馬鹿なことを考えるんじゃない」

「そうだわね。翔が誰かを苛めるなんて、そんなことありえないわね。私、どうかしている。でも、私の知っている翔と学校での翔があまりにも違うから、混乱してしまっ」

「苛めていたなんてことは絶対ないと思うが、一応調べてみるよ」

章之の顔が急に十歳も老け込んだように見えた。夫まで倒れてしまったらどうしよう。無理はさせたくない。

秀美の心配をよそに、章之は精力的に情報を集めているようだった。

そんなある日、流れる汗をハンカチで拭いながら、章之が病室へ入ってきた。

「翔の友達に色々聞いてみたんだけどね、あの公園には結構ワルが集まっていたらしいぞ」

「友達って健君？」

「そう。彼なら小さい時から翔を知ってるから。彼の話によると、いつも公園にたむろしているやつらがいるそうだ。公園をバイクで走り回っている高校生が主なんだが、中学生も混じっているらしいし、そういう連中の裏には暴力団がいることが多い」

「その中学生達は翔の学校の生徒なの？」

「ああ、札付きばかりだ。中退組もいる」

「まさか翔が……」

「いやいや、翔がその仲間だったわけではない。学校では有名なグループらしいし、翔もそのことは知っていたみたいだ。むしろ誰かが襲われている所を目撃して、警察に通報したこともあったと健君は言っている」

「そんなことして……。逆恨みされるかもしれないのに」

「健君もそう思ってやめろと言ったが、放っておくと死んでしまうかもしれないと自分の携帯から110番に電話したという話だ」

「いつごろのこと？」

「五月の連休の時だ。翔と一緒に犬の散歩をしている時、小さな犬だからと思ってリードを外してミルクィの後を追いかけていたら、襲われている場面にでくわしたんだと」

章之は考え込むように、じっと窓の外を眺めている。もう五時だというのに空は明るく、じりじりとした日射しも衰えていない。

二週間が経過しても、それ以外のめぼしい事実は浮かんでこなかった。やはり単なる事故なのだろうか。近頃、章之の目が窪んできたように見える。

大学からのちょうど帰り道になるからと言いながら、岡野は時々病室に顔を出す。

「翔君はその後どうですか？」と心配そうに聞いてくる岡野に、秀美は好感を持った。今時の大学生にしては、服装もきちんとしている。翔を公園で発見してくれたのだから、きっとあの辺りの事は詳しいのだろう。ワルグループのことも何か知っているかもしれない。折を見て聞いてみよう。

旧盆を過ぎてもう八月も終わりに近いが、秋の気配は感じられない。相変わらずの熱波と湿気で秀美も体調を崩した。熱もあるのか、体がだるい。まだ午前中だというのに、目を開けていようと思っても瞼が自然と降りてくる。翔の手を握ったまま、秀美は眠ってしまった。



翔が走っている。秀美の目の前を通り過ぎて、森へ向かって走っていく。

『翔！』追いかけながら大声で呼びかける。だが、翔は振り向かない。

『翔！』

森の入り口で翔が振り向いてにっこり笑ったような気がした。だが、地面から湧き出たような白い霧が行く手を阻んだ。

霧に包まれて、翔の姿は見えなくなった。

『翔！』

自分の叫び声で、秀美は目を覚ました。Tシャツが汗で濡れて、肌に吸い付いているようだ。立ち上がろうとすると眩暈がした。ベッドの端に腰掛けて着替えをする。背中に悪寒が走った。

秀美は翔の傍に置いてある付き添い用の簡易ベッドに倒れるように横たわった。

夢が襲ってくる。翔は霧の中へ消え、秀美は自分の叫び声に驚く。

何回同じ夢を見ただろうか。

その度に叫ぶ。

翔、逃げないで、帰ってきて。

その声で目を覚ます。

突然、額に冷たいものが置かれた。ひんやりとして心地よい。ちらっと目をあけ、再び瞼を閉じる。秀美は夢の中へまた引きずり込まれた。

翔は相変わらず森へと走っていく。森の入り口で振り返って秀美を見る。そして消える。すると森の中から白い犬が走り出てきた。

ミルクィー？

あれはミルクィー？

ふさふさの尾を懸命に振りながら、一目散に秀美の方へ走ってくる。

『ミルクィー！ ミルクィーなのね』

秀美はミルクィーを抱き上げようとした。

その時、霧が地面から立ち昇り、白い渦の中にミルキーと秀美を巻き込んだ。宙に浮いているかのような感覚が秀美を襲った。やがて現れたときと同じように、唐突に霧が消えた。

『ミルキー、大丈夫？』

『クーン』ミルキーは答えた。

『ここはどこなの？』

ミルキーはまるで秀美を案内するかのよう、前を歩き始めた。左右には何も見えない。道だけが真っ直ぐに伸びている。道はやがてカーブを描き、見覚えのある公園へと続いている。

『ここはあの公園じゃないの！』

ミルキーは突然走り出した。両側に赤いつつじの花が咲いている道を、全速力で駆けて行く。秀美も追う。ミルキーを見失ってはいけない。

公園の中央にある池の辺りから叫び声が聞こえる。

『やめろ、やめてくれー』

一人の若い男が顔のない数人の少年に囲まれている。

頭を腕で守るように抱えて、地面に這いつくばっている。

少年たちは手に持った棒を振り上げた。

頭を打つ鈍い音と悲鳴が聞こえる。

ミルキーがうなり声を上げて突進していく。

数人に抱え上げられた若い男は、宙を飛んで池の中へ落ちていく。

水しぶきが高くあがった。

池の中央を泳いでいた水鳥たちが、羽をばたつかせ水面から飛び立つ。

パトカーと救急車のけたたましいサイレンの音が近づいてきた。

肩を揺らされて秀美は目を覚まし、翔の手を離した。

「どうした？」心配そうに顔を寄せている章之と目が合った。救急車のサイレンの音がまだ聞こえている。

「サイレン？」秀美は呟いた。

「救急車だろう。急患が運ばれてきたんじゃないか？」そう言いながら、章之は秀美の額の上の温かくなってしまったタオルを取りあげた。

翔は病院に任せて、今日は一緒に家へ帰ろう、との章之の言葉に秀美は強く反対した。

「翔が目を開けたとき、そばに家族がいなかったら可哀相じゃないの。いつ意識が回復するか分からないんですもの」

「しかたない、君は家でしっかり寝ているんだぞ。こっちには僕が泊まろう。熱が引いて元気になるまで病院に来るんじゃない。翔に風邪を移したら大変だ」

自宅に戻った秀美は、寝室に入ると窓を開け、エアコンもつけずベッドに横になった。閉めっぱなしだった家の中は熱気が籠っていたが、暑いとは感じなかった。枕元に携帯電話と飲み物を置く。そして眠った。パジャマが汗で濡れると取替え、又眠る。ひたすら眠った。

次の日の朝、熱はひいていた。微熱はまだ残っているようだがかなり楽になっている。キッチンで氷水を飲みながら、エアコンのスイッチを入れた。今日も朝から気温が三十度近い。

夢の中で久しぶりに見たミルキーの愛らしい姿が秀美の気持ちを慰めたものの、池に落とされた若い男の顔に見覚えがあるような気がして、頭から消えない。

昼食用の弁当を二人分作って、病院へと向かった。章之の休暇も残り少ない。来週からは出勤になる。この夏の異常な暑さと心労とで体力を消耗しているはずだ。スラックスも腰周りがかかりゆるくなっている。会社へ出る前に少し体を休ませないと倒れてしまう。食事もそろそろ何かしないと、外食や出来合いのものでは体に良い訳がない。

「もう来たのか、今日一日家で休んでいれば良かったのに」

病室に入ると、章之が片方の眉を吊り上げて言った。

「風邪じゃないわ、咳もないし喉も痛くない。熱も下がったから大丈夫」秀美は笑顔を見せた。

午後になると章之は家へ戻り、秀美は翔の傍らに座り手を握った。

午後の日射しが眠気を誘う。

深い霧で何も見えない。

霧の向こうから数人の声が聞こえる。

『あの犬、生意気だったからな』

『懲らしめてやった』

『飼い主の代わりに、犬に責任とってもらったわけよ』

『どうやって？ 首でも絞めたか？』

『犬は食い意地が張ってるからな』

『毒殺？』

『正解！ 生肉に除草剤をたらしておいた』

『他の犬が食ってたらどうする？』

『知ったことか』

『で、どうなった？』

『食ったんじゃないねえの？ 肉はなくなってたし、あれからあの犬見かけないから』

『目立ったからねえ、あの犬』

『かっこつけやがって、ちび犬の癖に』

『あいつはどうする？』

『あいつね、そのうち可愛がってやろうぜ』

『楽しみはとっておくってか』

笑い声が遠ざかっていく。

霧の向こうからミルクキーが走ってくる。

『ミルクキー。良かった、生きてたのね』

秀美はミルクキーの白い絹のような毛を撫でようと手を伸ばした。

霧が生き物のようにミルクキーを絡めとる。

『クーン』と泣き声を残して、ミルクキーは消えた。

秀美は目を開けた。翔は仕返しをされたのかもしれない。

背筋に悪寒が走った。

章之に夢の話をするべきかどうか、秀美は迷っていた。笑わないにしても、信じてはもらえないだろう。妻の頭がおかしくなったと心配するかもしれない。

「翔、お願い。何があったのか教えて」

秀美は翔の手をさすりながら、目を閉じた。

霧の中を自転車で走っていた。

全速力でペダルをこぐ。

背後からバイクのエンジンの音が聞こえる。

右からもバイクが追いかけてくる。

左へ逃げよう。

曲がろうとしたとき、左からもエンジン音が近づいてきた。

逃げるところは公園しかない。

公園へと方向を転換する。

入り口へ自転車を入れようとスピードを上げる。

ロープが、入り口に張られたロープが目の前に迫ってくる。

避けられない。

ロープが自転車の行く手を阻む。

体が宙に投げ出され、頭から地面に落下した。

エンジン音が遠ざかっていく。

秀美の心の中は沸騰した湯のように怒りで煮えたぎっていた。

許さない、私の息子を傷つけたものを決して許さない。

秀美の手には包丁が握られている。

公園では数人の少年が地べたに座り、高笑いをしている。

秀美は少年たちの背後に迫り、包丁を突き刺そうと振り上げた。

その時、秀美の白いコットンパンツの裾を後ろに引っ張るものがある。

振り返って足元を見た。

『ミルクキー！』

裾を口にくわえ、足を踏ん張り全身の力で引っ張っている。

『ミルキー』

思わず、包丁を取り落とした。

既に少年たちの姿はない。

秀美はミルキーの体を抱きしめた。

霧が周囲の景色を全て消し去り、一本の枯れ木だけが残っていた。



「秀美、秀美」 呼ばれて、秀美は目を開けた。章之が傍らに立っている。

「うなされて、恐ろしい夢でも見たのか？」

それには答えず、無意識に抱えていた腕の中のタオルをベッドに置いた。

翔の顔を見る。

秀美の目は翔の顔に釘付けになった。

「あなた……」

声が震える。

「翔が、目を開けたみたい」

「ほんとか？」

翔がうっすらと目をあけていた。

「ナースコールを押せ。僕は直接知らせに行ってくる」

興奮した声を残して章之は病室を出て行った。

人の気配を感じて、秀美は振り返った。病室の入り口に岡野が立っていた。

「岡野さん、翔が目を開けたんですよ。意識を取り戻したんですよ」涙声になっていた。

「良かった、ほんとに良かった」岡野も涙ぐんでいるようだった。

「診察の邪魔になると思いますから、僕はこれで失礼します」岡野は深々と一礼すると帰っていった。

章之も仕事に戻り、翔の容態も日に日に回復していった。若さとは凄いと秀美は感じていた。今のところ後遺症もなく、リハビリも順調に進んでいる。事件の事は話題にしないように気をつけている。元気になればそれでいいと考えるようになった。秀美の見た夢は誰にも話さないでおこう。夢にしかすぎないのだから。

岡野はあれから顔を出さない。意識を回復した翔に会いに来てくれればいいのにと願っているのに。翔から直接お礼を言わせたい。

退院の話も出てきた頃、突然警察の訪問を受けた。土曜日とあって、章之も病室で翔とたわいもない話をしながら談笑しているときだった。

「警察が何の御用でしょう？」

「ご両親に少しお話したいことがあります。病室以外の場所はありませんか」

「事故のことですか？」章之も不審な顔をしている。

「ええ、まあ」

病院の計らいで、「相談室」と書かれた小さな部屋に移動した。

「今更、何の話ですか？」章之の口調には苛立ちが現れている。秀美も何を今頃と思わないでもない。

「実は犯人が自首してきました」

「犯人？」二人で聞き返す。

「事故じゃなかったんですね」

一瞬、秀美は例の中高生たちが自首してきたのかと考えた。

「犯人は岡野信二という大学生で現在二十歳になっています」

秀美は声が出なかった。何を言われたのかまるで理解できなかった。心臓の鼓動が速くなる。

警察の話によると、岡野は公園でたむろしている少年たちの標的になり、かなり酷い暴行受けていた。仕返しをしようと、少年たちが公園に集まる夜の九時ごろを狙って、入り口にロープを張った。夜に真っ暗な公園に来る住民はいないし、歩いて入る人間には問題ないと考えた。ロープ避けて通ればいいことですから、と岡野は言った。

まさか翔君が自転車で飛び込んでくるとは思いもしなかったと、岡野は取調室の机に突っ伏して泣きじゃくった。

あいつらは、いつもあの時間に弟分を後ろに乗せて三方から集まってくるんです。追いかけてっていると勘違いしたんじゃないでしょうか、ものすごい勢いで自転車を走らせていました。

ええ、ずっと見ていました、あいつらが転んで怪我をするのを見たかったですから。アルバイト先のコンビニに現れて嫌がらせするのを止めさせたかったです。腕か足でも折ってくればバイクも運転できなくなるし。でも、翔君はどうして追いかけてられていると思ったんでしょう。

秀美は呆然としていた。

あの岡野が犯人？

怒りと困惑と同情が秀美の心の中で三つ巴で争っている。怒りの矛先は岡野を池に落とした少年たちへと向かう。彼らは何の咎めも受けないのだろうか。

「一応取り調べています。相手は少年なのでなかなか難しいですな、色々問題がありますから」
そういい残して刑事は部屋を後にした。

椅子に座ったまま動こうとしない秀美の肩に、章之が手を置いた。

「翔は元気になった。幸いなことに後遺症もなさそうだ。まだ許すことは出来ないが、岡野君も被害者だったんだよ」

秀美は頷いて立ちあがった。

家族にとって辛く、大変な事件だったけれど、失いそうになったものを取り戻すことができた
と秀美は思えるようになった。いつか春の青空のように暖かい気持ちになれるかもしれない。

明日、ミルキーのお墓に行って、今度の事件の報告もしてこよう。秀美は穏やかな気持ちで病室の窓から空を眺めた。

